学習活動に目的意識をもった児童の育成

―キャリア教育の考え方を取り入れて―

教職実践基礎領域
福重　真輝也

Ⅰ　はじめに

教育の中で、児童と教師の関わる時間が最も長い活動は授業である。教師として児童の学びに関わるためには、主体的に授業に参加する児童を育むことが必要だと考えている。

学部時代から大学院にかけて、アクティブラーニングや切実感を与える教材について学び、児童が「もっと授業を受けたい」と感じるような、楽しく分かりやすい授業づくりを目指してきた。しかし、理論をもとに実践をする中で、新たな視点が生まれてきた。

Ⅱ　主題設定の理由

１　児童の実態

○協 力 校：愛知県の公立小学校
（以下、連携協力校と記す）
○対象児童：小学生１～６年
○対象期間：2017 年９月～2018 年 12 月末まで、
１週間に２日間（月曜と木曜）活動。
○活動内容：学校サポーター活動として、様々な
教育活動の補助を行った。

サポーター活動を通して、児童が集中して授業を受ける姿、積極的に挨拶をする姿、大きな声で歌う姿、全力で遊ぶ姿など、のびのびと学ぶ児童の姿が見られた。その一方で、次のような児童との関わりもあった。

「先生、何のために学校で勉強するの」と児童に質問をされたことがある。私は、児童の質問に対し「君の将来のためだよ」と答えた。その答えに対し児童は、「将来なんてどうでもいい、どうせ何もできない」と答えた。その答えに対し、私はかける言葉が見つからなかった。これは、この児童だけの考えではない。他の児童と関わっていても「勉強なんてやっても意味がない」「やってもできないからやりたくない」「あの子みたいに能力がないし、あの子がやればいい」など、学習活動に主体的に取り組むことができていない児童の姿が気になった。

このような児童に対し、授業内容を工夫して児童の興味を引き付けることで、主体的な学習意欲へと導くことができることもある。しかし、様々な工夫をしても授業に対して参加の意思を示さない児童もいた。この経験から、授業に対して参加の意思がない児童には、授業を工夫する以前に、何か取り組めることがあるのではないかと感じるようになった。

２　今日的な教育課題

（１）学びに向かう力

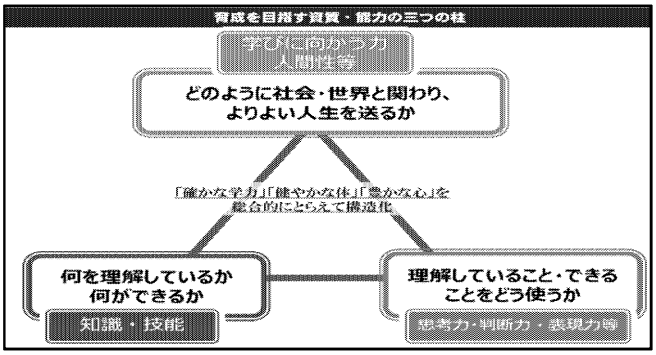
2017 年に小学校学習指導要領が改訂された。この改訂で、特に注目したものが“学びに向かう力”である。

新小学校学習指導要領解説総則編（以下、学習指導要領と記す）では、「学びに向かう力、人間性等」について次のように述べている。

> 「児童一人一人がよりよい社会や幸福な人生を切り拓いていくためには、主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、自己の感情や行動を統制する力、よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度等が必要となる。〔中略〕こうした力は、社会や生活の中で児童が様々な困難に直面する可能性を低くしたり、直面した困難への対処方法を見いだしたりできるようにすることにつながる重要な力である」

学びに向かう力は、学力の三要素として示されてきた「主体的に学習に取り組む態度」を含むもので、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力の三つの柱の一つとして位置付けられている。

学習指導要領は、三つの柱について、「生きる力を具体化したもの」「“何のために学ぶのか”という学習意義を、資質・能力として明示したもの」と述べている。また、中央教育審議会（2016）では、以下の資料を提示している（図１）。



【図１：育成を目指す資質・能力の三つの柱】

図１を見ると、三つの柱が三角形に結ばれており、それぞれの柱が相互に関係し合うことの必要性を読み取ることができる。学習指導要領では、三つの柱の関係性について、「児童は学ぶことに興味を向けて取り組んでいく中で、新しい知識や技能を得て、それらの知識や技能を活用して思考することを通して、新しい知識や技能をより確かなものとして習得するとともに、

思考力、判断力、表現力等を養い、新たな学びに向かったり、学びを人生や社会に生かそうとしたりする力を高めていくことができる」と述べている。

「学びに向かう力、人間性等」が他の二つの柱の動機づけとなっているように、“生きる力”を育むためには、まず児童の主体的な学習意欲を育む必要があると考えた。そこで本研究では、「何のために学ぶのか」を児童に理解させるための実践をしていく。

（２）キャリア教育

文部科学省(2016)は、三つの柱の育成において、「各教科等を学ぶ意義を明確にし、各教科等において育む資質･能力を明確にすること」の必要性を述べている。この点が必要とされた背景として、「将来就きたい仕事や自分の将来のために学習をしようとする意識が低い」ことにより、「学校での生活や学びに目的意識をもって取り組めていない」（文部科学省、2011）という課題がる。この課題は、キャリア教育が必要とされてきた背景とも重なる。

文部科学省(2011)は、キャリア教育の意義を「将来の生き方や進路に夢や希望を持ち、その実現を目指して、学校での生活や学びに意欲的に取り組むようになること、これがキャリア教育を行うことの意義である〔中略〕/なぜ学ぶのか、なぜ学ばなければならないのか、何を学ぶべきかを学ぶ教育」と述べている。授業に参加できていない児童に対して、「何のために学ぶのか」を理解させるために、キャリア教育の考え方を取り入れることが必要であると考えた。

しかし、小学校のキャリア教育は十分に機能していないことが指摘されている。学習指導要領では、キャリア教育の今日的な課題を次のように述べている。

> ○指導場面が曖昧になっている。
> ○特別活動において進路に関する内容が存在しない小学校においては、体系的に行われてこなかった。
> ○将来の夢を描くことばかりに力点が置かれ、「働くこと」の現実や必要な資質･能力の育成につなげていく指導が軽視されているのではないか。

このような課題を踏まえて、学習指導要領では、キャリア教育の充実に向けて次のように述べている。

> 「児童が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら社会的、職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること」

本研究では、キャリア教育の充実の視点を取り入れて、特別活動で学ぶ必要性を考え、各教科の授業において「何のために学ぶのか」という学ぶ意義を理解させる実践を目指していきたいと考えた。

３　目指す児童の姿

本研究を通して目指す児童の姿を、次のように設定する。

> 学習活動に対する目的意識をもち、
> 主体的に学びに向かう児童

４　研究テーマ

以上のことを踏まえ、研究テーマを『学習活動に目的意識をもった児童の育成―キャリア教育の考え方を取り入れて―』とした。主体的な学びへと導くために、本研究では「何のために学ぶのか」を理解させることで、学びに対して目的意識をもたせることを目指す。

また、学ぶ意義を理解させる手立てとして、キャリア教育の考え方を取り入れることで、学習活動に将来を見通した目的意識がもてるよう研究を進めていく。

Ⅲ　研究の構想

１　基本となる考え方

（１）なぜ人は学ぶことが必要なのか

齋藤(2011)は、次のように述べている。

> ○学ぶことは、まさに「呼吸」をすることです。
> ○前向きに学んでいる人は、学びの推進力によってストレス耐性が高まります。

齋藤は、学ぶことを「呼吸」と捉え、学ばなくなることは死と同じぐらい怖いことと表現している。また、学びから得られるものを「進むべき道が自然に開けるもの」「心の免疫力を高めるもの」としている。これらの考えを踏まえ、学ぶことの意義を“将来を見通した生きる力を育む”ためであると考えた。

（２）参考となるキャリア教育の実践

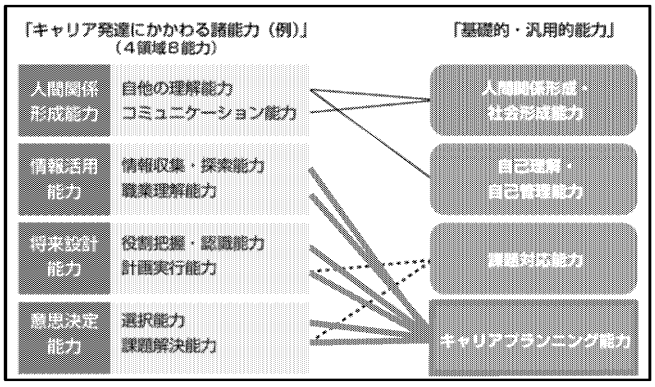
関(2008)は、小学校６年生を対象に、将来に夢と希望をもち、努力する子どもを育むための活動構成と支援のあり方を検証した。１年間の実践を通して、「なぜ学ぶのか」という疑問に対し、様々な人の職業観・勤労観に触れることで、児童に学ぶ意義を考えさせた。また、将来の自分の姿を見つめながら、今の自分の生き方を考える児童の姿から、「キャリア教育」のねらいに近づけたという成果を述べている。

この実践を参考に、本研究では児童に学ぶ意義を考えさせ、今の自分の生き方を考えることで「なぜ学ぶのか」という問いに迫っていく。ただし、関は特別活動での実践であったが、本研究では教科の授業で学ぶ意義をもたせることも目指すため、「特別活動→学校生活･日常生活→授業(体育)」の順に実践を行っていく。

（３）キャリア教育を通して育成すべき能力

文部科学省は、平成２３年にキャリア教育で育成すべき力を「４領域８能力」から「基礎的･汎用的能力」へ転換すると提案している。この理由の一つとして、

「４領域８能力」の語感や印象に依拠した実践が散見されたことが挙げられている(図２)。



【図２：「４領域８能力」と「基礎的・汎用的能力」との関係(文部科学省 2011)】

本実践では、４つに分類されている「基礎的・汎用的能力」の中でも、学ぶ意義の理解や将来設計の能力を含んだ“キャリアプランニング能力”の視点を意識することで、将来を見通して学ぶ意義の理解を目指す。

また、キャリアプランニング能力の中でも、キャリア発達に関わる諸能力との関係を意識し、育成すべき力を明確にするため、本実践では、将来設計能力と意思決定能力の育成を目指すこととした(表１)。

【表１：職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み(例)　筆者加筆(文部科学省 2011)】

	領域説明	能力説明	高学年
人間関係形成能力	他者の個性を尊重し、自己の個性を発揮しながら、様々な人々とコミュニケーションを図り、協力・共同してものごとに取り組む。	【自他の理解能力】 自己理解を深め、他者の多様な個性を理解し、互いに認め合うことを大切にして行動していく能力	・自分の長所や欠点に気付き、自分らしさを発揮する。 ・話し合いなどに積極的に参加し、自分と異なる意見も理解しようとする。
		【コミュニケーション能力】 多様な集団・組織の中で、コミュニケーションや豊かな人間関係を築きながら、自己の成長を果たしていく能力	・思いやりの気持ちを持ち、相手の立場に立って考え行動しようとする。 ・異年齢集団の活動に進んで参加し、役割と責任を果たそうとする。
情報活用能力	学ぶこと・働くことの意義や役割及びその多様性を理解し、幅広く情報を活用して、自己の進路や生き方の選択に生かす。	【情報収集・探索能力】 進路や職業等に関する様々な情報を収集・探索するとともに、必要な情報を選択・活用し、自己の進路や生き方を考えていく能力	・身近な産業・職業の様子やその変化が分かる。 ・自分に必要な情報を探す。 ・気付いたこと、分かったことや個人・グループでまとめたことを発表する。
		【職業理解能力】 様々な体験等を通して、学校で学ぶことと社会・職業生活との関連や、今しなければならないことなどを理解していく能力	・施設・職場見学等を通し、働くことの大切さや苦労が分かる。 ・学んだり体験したりしたことと、生活や職業との関連を考える。
将来設計能力	夢や希望をもって将来の生き方や生活を考え、社会の実現を踏まえながら、前向きに自己の将来を設計する。	【役割把握・認識能力】 生活・仕事上の多様な役割や意義及びその関連等を理解し、自己の果たすべき役割等についての認識を深めていく能力	・社会生活にはいろいろな役割があるとやその大切さが分かる。 ・仕事における役割の関連性や変化に気付く。
		【計画実行能力】 目標とすべき将来の生き方や進路を考え、それを実現するための進路計画を立て、実際の選択行動等で実行していく能力	・将来のことを考える大切さが分かる。 ・憧れとする職業を持ち、今、しなければならないことを考える。
意思決定能力	自らの意思と責任でより良い選択・決定を行うとともに、その過程での課題や葛藤に積極的に取り組み克服する。	【選択能力】 様々な選択肢について比較検討したり、葛藤を克服したりして、主体的に判断し、自らにふさわしい選択・決定を行っていく能力	・係活動などで自分のやりたい係、やれそうな係を選ぶ。 ・教師や保護者に自分の悩みや葛藤を話す。
		【課題解決能力】 意思決定に伴う責任を受け入れ、選択結果に適応するとともに、希望する進路の実現に向け、自らの課題を設定してその解決に取り組む能力	・生活や学習上の課題を見つけ、自分の力で解決しようとする。 ・将来の夢や希望を持ち、実現を目指して努力しようとする。

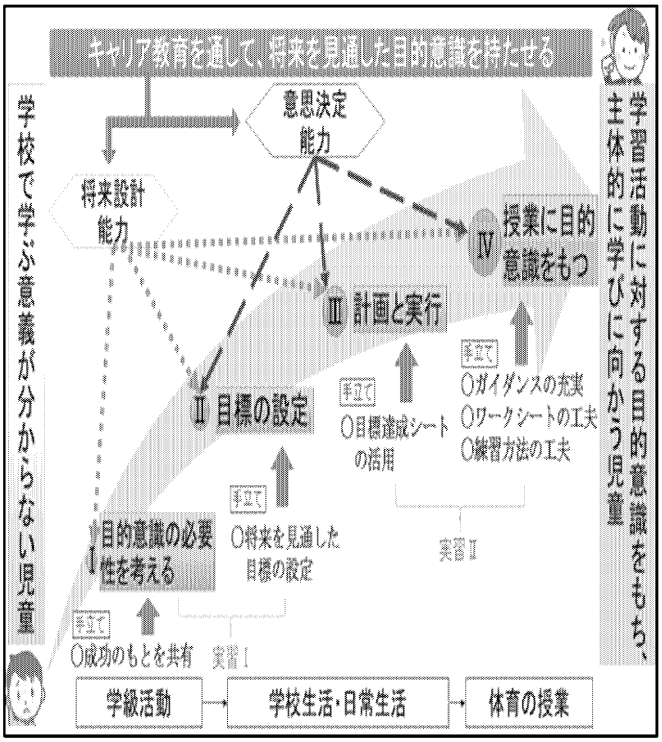
２　研究構想図

（１）研究における実践の学年と日程

○協　力　校：連携協力校
○対象児童：小学５年生
○対象期間：教師力向上実習Ⅰ(以下、実習Ⅰ)
　　→５月７日～６月１日
　　教師力向上実習Ⅱ(以下、実習Ⅱ)
　　→９月２５日～１０月１９日

（２）研究構想図について

上記の実習日程や環境を踏まえて、これまで述べてきた、テーマ設定の背景、基本となる理論をもとに下記のような研究構想図を作成した(図３)。



【図３：研究構想図】

（３）実践の流れ

実践の段階	実践内容
第Ⅰ段階	学級活動で目的意識の必要性を考える。
第Ⅱ段階	目的を意識した目標を設定する。
第Ⅲ段階	目標達成に向けた計画を立て、実行する。
第Ⅳ段階	体育の授業に目的意識をもたせる

学級活動で考えた将来に対する目的意識を、上記の段階を通して、授業に対する目的意識をもたせることを目指す。

３　研究の方法

本研究では、アンケート調査とワークシートの結果から抽出児を選び、実践前後の学習活動に対する目的意識の変化を、下記の視点から考察していく。

○将来への目的意識がないことにより、学習活動に参加する意欲がない児童を抽出児とし、実践前と実践後に行うアンケート結果の変容から考察する。

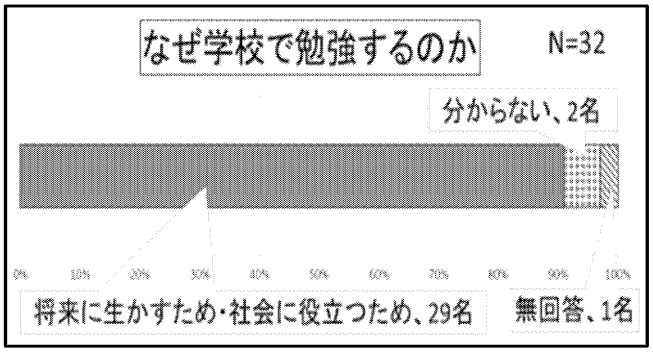
Ⅳ　研究の内容と考察

１　実践の対象学級

実習Ⅰ・Ⅱとも５年生の同一学級で実践をした。児童数は３３名（男子１５名、女子１８名）で、そのうち欠席がちの児童が１名いた。

２　活動前の児童の意識

実践の前に児童の実態を把握するため、アンケート調査を行った。「学校でなぜ勉強すると思いますか」という問いに対し、「将来に役に立つから」「頭をよくするため」「いい大学に進学するため」「分かりません」など、様々な回答があった。回答の内容を、未来の自分を見つめたものとそうでないものに分別したところ、資料１の結果となった。



【資料１：「なぜ学校で勉強をするのか」意識調査】

資料１の結果をもとに、学ぶ意義を理解していない「無回答」（児童Ａ）、「分からない」（児童Ｂ，Ｃ）と回答をした児童３名を取りあげて、学級全体との比較したところ、表２のようになった。

【表２：意識調査に関する事前アンケート結果の比較】

質問内容	児童Ａ	児童Ｂ	児童Ｃ	学級の平均
何にでも進んで挑戦できる。	1	2	5	4.78
難しいことでもやればできる。	1	3	6	5.19
勉強は将来につながる。	1	2	3	5.25
合計	3	7	１４	15.22

※「そう思わない←１・２・３・４・５・６→そう思う」と回答

アンケートでは、「何にでも進んで挑戦できる」「難しいことでもやればできる」「勉強は将来につながる」の３項目を６件法で調査した。数値が高い児童ほど、質問に対する意識が高いというものである

表２を見ると、児童Ａと児童Ｂの数値が低いことが分かる。二人の児童は、「勉強は将来につながる」という質問に対し、学級の平均と比べて低い結果となった。また、これまでの生活で学ぶ意義について考えていないため、主体的な学習につながらず、「何にでも進んで挑戦できる」「難しいことでもやればできる」の問いに対して、数値が低くなったと考えた。

このような結果をもとに、本研究では２人の児童(児童Ａと児童Ｂ)を抽出児として、取り組みの様子や実践後アンケートから学習活動に対する目的意識の変容を考察していくこととした。

３　教師力向上実習Ⅰの実践と考察

（１）第Ⅰ段階『目的意識の必要性を考える』

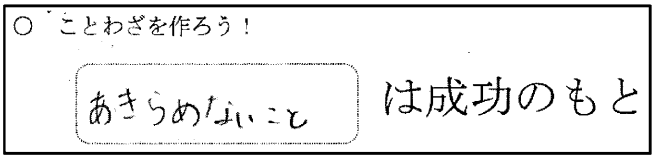
①実践の概要

実践場面	学級活動 題材：〇〇は成功のもと！
実践時期	５月中旬
ねらい	挑戦することに肯定的な考えをもたせること、失敗のメリットについて考えることから、将来に対する目的意識の必要性を考える。
キャリア教育の視点	将来に対する目的意識をもち、夢や目標をもつことの大切さを考える。　(将来設計能力)
活動内容	ことわざの“失敗は成功のもと”を軸に、各自の成功のもとを話し合う活動から、成功に必要な要素を考える授業を展開した。

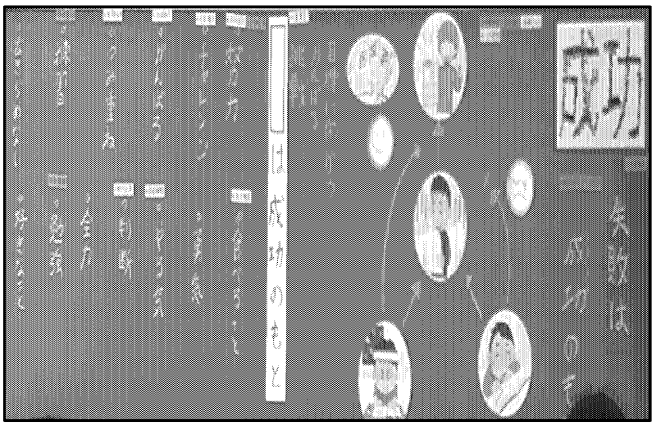
②実践内容＜手立て：成功のもとを共有＞

授業では、まず“失敗は成功のもと”について話し合った。ことわざの意味を整理し、賛成か反対かを問いかけたところ、４名の児童が反対という意見を示した。反対の理由としては、「どうせできないから成功に結び付かない」「あきらめてしまう」などの意見がでた。ちなみに、反対の意見を示した４名中３名は、児童Ａ，Ｂ，Ｃである。

“失敗は成功のもと”について話し合った後、失敗の他に成功に結び付くものを各自で考え、新しいことわざの作成をした。「〇〇は成功のもと」と題し、ワークシートに記入した後、学級全体で意見を出し合った。



【資料２：学級活動「〇〇は成功のもと」のワークシート】



【資料３：学級活動「〇〇は成功のもと」の板書】

その結果、「あきらめないこと」の他に、「努力・チャレンジ・がんばる・つみ重ね・練習・食べること・勇気・やる気・判断・全力・勉強・好きなこと」という意見が出た。そこで、作成したことわざに共通することを話し合った。その結果、「挑戦していること」「目標をもっていること」という意見が出た。この意見をもとに、夢や目標をもつことは成功につながることを確認し、挑戦することの大切さを共有した。

③成果と課題

〔成果〕

○ねらいに対して

児童が考えた成功のもとから、学級での話し合いを通して、「挑戦すること」「目標に向かって頑張ること」が大切であるという意見が出た。この結果をもとに話し合いを進めたことで、キャリア教育の視点である将来に対する目的意識をもつことの必要性を考えることができたと思われる。

○抽出児の様子から

児童Ａと児童Ｂは、“失敗は成功のもと”に対して、反対という意見に挙手をした。その意見としては、「努力しても報われない」という考えであった。そのため、この２人には、努力が報われる体験が必要であると考えた。そこで、第Ⅲ･Ⅳ段階では成功体験ができるように工夫していきたいと考えた。

〔課題〕

○抽出児の様子から

抽出児の「○○は成功のもと」は、児童Ａ「がんばること」、児童Ｂ「好きなこと」であった。２人は、“失敗は成功のもと”に否定的な考えを示した児童だったので、２人の意見をもとにして話し合いを広げることができれば、より深い話し合いができたと感じた。

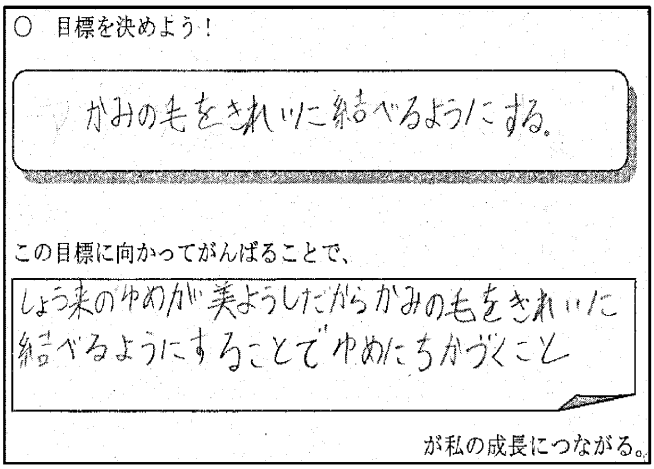
（２）第Ⅱ段階『目標設定』

①実践の概要

実践場面	学級活動（○○は成功のもと） 学校生活と日常生活
実践時期	５月中旬～６月上旬
ねらい	主体的に取り組むことができる目標を、児童自身で設定する。
キャリア教育の視点	主体的に取り組める目標を設定し、目標に取り組む中で成長する自分の姿を考える。　(計画実行能力) 自らの将来につながる目標を選択する。　(選択能力)
活動内容	学級活動の授業で、将来に対する目的意識の必要性を話し合った後、３週間の短期目標を設定した。 ただ単に目標を設定するのではなく、授業で考えた成功のために今の自分ができることを考えるように促し、自らを客観視できる機会となるよう設定した。

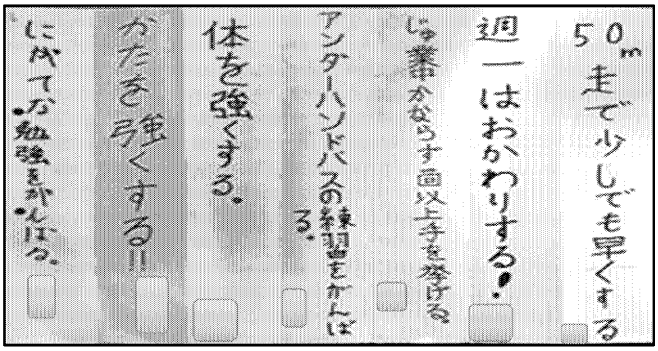
②実践内容＜手立て：将来を見通した目標の設定＞

目標設定をする際に、学校生活に関することに限らず、自由に目標を設定させた。これは、主体的に取り組むことができる目標にするためである。また、その目標に向かうことで自分の成長につながりそうなことを、次の資料のように考えさせた。



【資料４：目標設定のワークシート内容】

資料４を活用し、目標に対するイメージを具体的に考えさせることや、何のために頑張るのかを考えさせることを目指した。例えば、この児童は、「かみの毛をきれいに結べるようにする」という目標に向かうことで、「ゆめにちかづくこと」が自身の成長につながると考えた。また、目標に対する意識の持続性を高めるために、色画用紙に目標を書き、教室に掲示することで目標の見える化を目指した。（資料５）



【資料５：目標を記した掲示物】

③成果と課題

〔成果〕

○ねらいに対して

自分の興味があることについて目標を決めたので、目標設定の時点では、目標に対する意識が高まっている児童の姿が見られた。

〔課題〕

○ねらいに対して

目標設定に苦戦していた児童が３名（うち２名は児童Ａと児童Ｂ）いた。３名の児童は、夢や目標が明確でないため、何を書こうか困惑している様子であった。そのため、実習Ⅱでは目標を設定する際に、具体例を提示する必要があると考えた。

○抽出児の様子から

児童Ａ

目標：ユーチューバーになる友達を作る。

成長につながること:パソコンを買うためにお金を貯める。

児童Ｂ

目標：将来のためにいろいろ作る。

成長につながること：？

この結果から、目標が具体的でないことや、目標に向かって成長するイメージをもつことができていないと考えられる。自由に目標を設定させることは、目標の立て方が分からない児童にとって、逆に難易度が高くなると感じた。

○キャリア教育の視点

将来につながる目標を選択する(選択能力)ことはできている児童が多かったが、目標を設定し取り組む中で成長する自分の姿を考える(計画実行能力)ことにはつながらなかった。この結果から、実習Ⅱでは、目標に向かって計画し実行できるための手立てが必要であると考えた。

４　教師力向上実習Ⅱの実践と考察

（１）第Ⅲ段階『計画と実行』

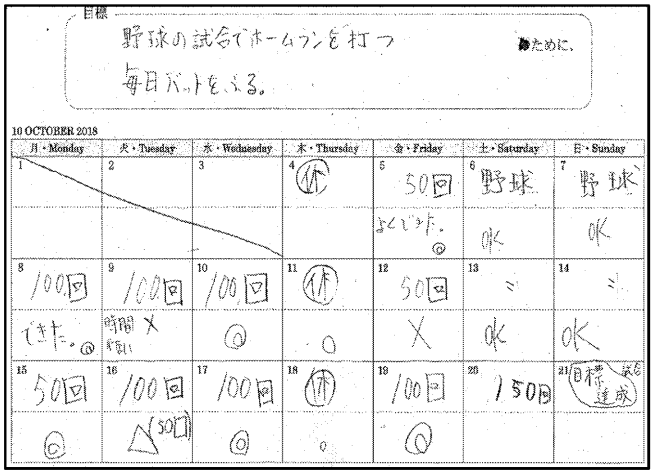
①実践の概要

実践場面	学校生活と日常生活
実践時期	１０月上旬～１０月下旬
ねらい	日付ごとに計画を立てることで、意思決定能力や将来設計能力を育成する。また、活動を視覚的に振り返ることで、成長を実感させる。
キャリア教育の視点	課題解決に向けて努力することができる。また、成長を感じ取ることができる。(意思決定能力) 夢や希望をもって、将来の生き方や生活を考え、前向きに自己の将来を設計することができる。(将来設計能力)
活動内容	目標に向かって取り組む計画を立て、計画をもとに実行し、振り返りの活動を行った。また、目標を達成するためにより具体的な計画を立てることを目指した。

②実践内容＜手立て：目標達成シートの活用＞

目標に対する取り組み方を明確にするために、目標達成シートを作成しようと考えた。そこで、取り入れたのが手帳である。長谷川(2012)は、手帳によって身に付く力について、「①生活習慣力②時間管理力③計画実行力④経験活用力」の主に４つの能力が育ち、最終的に学ぶ力が育つと述べている。このような手帳の効果を生かし、目標達成シートを作成した。

目標達成シートを活用し、「～のために～をする」という形で目標を設定することで、目的を意識した目標を設定させた。実習Ⅰの反省を生かし、目標を設定する際に、数人の児童の目標を発表させることで、いくつか具体例を提示した。



【資料６：目標達成に対する計画のワークシートの記入例】

計画の方法は、①目標達成日を決める。②取り組む日を決める。③取り組む日ごとに取り組む内容を記入する。資料６の児童は、21 日を目標達成日に決め、素振りをする日を決めた後、日にちごとに素振りの回数を決めた。このような手順で、計画を立てた。

また、計画を立てた後に、目標達成シートをファイルに綴じ、教室に掲示することで視覚的に意識させた。活用方法としては、取り組み日にできた場合は○を記入し、できなかった場合は×を記入する。同時に、気づいたことがあれば感想を書き、途中で計画を変更してもよいこととした。

③成果と課題

〔成果〕

○ねらいに対して

目標を立てることに関しては、実習Ⅰでも実践をしたため児童が自ら目標設定することができていた。一度ではなく、何度か経験することで目標を設定する能力につながると考えた。

○キャリア教育の視点

詳細な計画を立てたことにより、目標に向けて努力を続ける児童が多くいた。その結果、成功体験を味わったことから、「また目標を立てたい」という意見がでてきた。こうした姿から課題解決に向けて努力し、成長を感じ取ること(意思決定能力)ができたと考える。

○抽出児の様子から

児童Ａは、「機械をじょうずに使えるようにするためにローマ字を全部うてるようにする」という目標を立てた。この目標は、将来の夢であるユーチューバーに向けて関連性のあるもので、具体的なものである。具体的な目標を描けたため、児童Ａは、「な行、は行、ま行、や行、ら行、わ行」を一日おきに練習する計画を立て、計画通り実践し、目標を達成していた。

〔課題〕

○ねらいに対して

児童は、学校での学びだけではなく、習い事、宿題、家庭の用事など様々な活動をしている。その活動に沿った目標を立てた児童は比較的取り組めていたが、活動に沿わない目標を設定した児童は時間がとれていない様子であった。自由に目標設定をすると目標の立てやすさは増すが、取り組むことが難しくなったようだった。次の実践では、範囲を絞った目標の選択ができるようガイダンスを工夫していく必要がある。

○抽出児の様子から

児童Ｂは、「楽しみのためにドローンをがんばる」という目標を立てた。児童Ａとは対照的に、将来との関連性が薄く、抽象的な目標設定だと感じた。そのため、計画の段階で何をすべきか書くことができていなかった。次の段階では、具体的な目標設定ができるように、成長につながる能力を提示する必要があると考えた。

（２）第Ⅳ段階『授業に目的意識を持つ』

①実践の概要

実践場面	体育科：器械運動（マット運動）
実践時期	１０月下旬
ねらい	・学びに対する目的意識をもつ。 ・単元を通して成長を実感する。
キャリア教育の視点	現状の能力を把握し、目標を設定することができる。 (計画実行能力) 目標達成に向かう過程において、課題解決に向かい努力することができる。また、成長を感じ取ることができる。(課題解決能力)

②単元構想

時数	学習内容
1	**目標設定** ・ガイダンスにおいて、学習のねらいと本学習について見通しをもつ。 ・チェックシートを活用し、現時点でのマット運動の能力を把握する。 ・学習の進め方を理解し、学習全体を通した目標の設定をする。
2・3	**目標達成に向けた練習** ・サーキットトレーニングで基礎となる運動の復習をする。 ・自分に合った練習方法を見つけ、目標に向けて練習をする。 ・連続技の方法を確認する。
4	**成長を実感する** ・発表会で練習の成果を発揮する。 ・チェックシートを使い、単元開始前と開始後の変化を見る。 ・成長したことを振り返る。

③実践内容

ア　＜手立て：ガイダンスの充実＞

小林(1982)は、体育科の授業における目標を明確にした授業について次のように述べている。

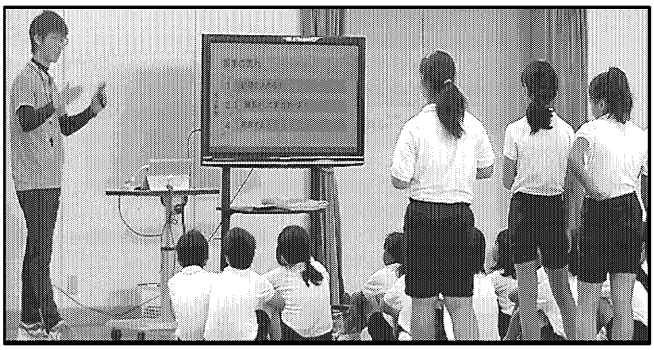
> 「教師による教授行為の最終のねらいは、子どもの目的意識で意欲的な学習を成立させ、子どもを学習主体として育てることである。〔中略〕何のために、何を、どう学ぶのかわかりながら運動ができるようになるのでなければ学習主体として育つことは見通せない」

これは、本研究のねらいでもある「何のために学ぶのか」を意識させることの重要性を述べている。「授業で目的意識をもつ」実践では、最終段階として授業を通して学べることを理解し、目的をもって授業に取り組ませることが必要となる。

小学校キャリア教育の手引(2011)には、学力向上にキャリア教育の視点を生かす取り組みとして、『各教科の授業や単元などのガイダンスを工夫し、目的意識を高める』ポイントについて述べている。そこで、第Ⅳ段階では、以下の「ガイダンスの効果」を取り入れた授業を展開していく。

> 「授業のガイダンスでは、主に学習の目的、学習内容、学習の流れなどを説明して見通しをもたせ、各自の学習に対する意欲を高める工夫がなされている。このとき、学習の目的と将来の生活を関連付け、より身近な、そして将来の生活に必要な学習であることを感じ取らせ、学習意欲をさらに高めることが考えられる。また、ガイダンスの際にはワークシートを準備して教科書やノートに綴じ込ませ、適宜確認させることも大切である」

本実践では、単元の導入（１時間目の授業）でガイダンスを実施した。児童に分かりやすく説明するために、テレビモニターを使用して、授業の進め方と本単元を通して学べることを示した（資料７）。



【資料７：ガイダンスの様子】

授業の流れや単元の進め方を説明し、本単元で扱う技を動画で紹介した。その後、児童が主体的な目標を設定するために、マット運動を通して学べることを３点あげた。

授業と児童の将来を関連付けるために、学べるポイントをこの３点にした。マットの技能や体の使い方に対する学びではなく、生きる力に関連する目標を掲げることで､授業に目的意識をもたせることを目指した。

マット運動を通して学べること

① マット運動の能力を高める。
（できないことができるようになること）

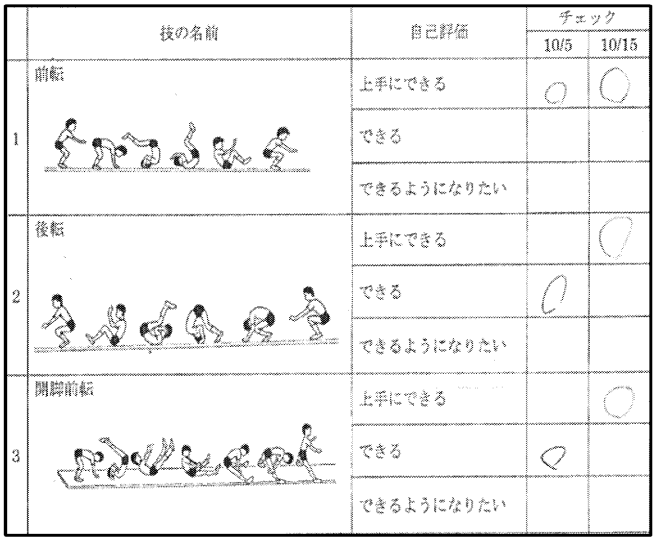
② 目標達成に向けて、練習方法を工夫したり友達と協力する力を身に付ける。

③ マット運動の楽しさやおもしろさを知る。

イ　＜手立て：ワークシートの工夫＞

○チェックシート

チェックシートは、成長を感じ取ることをねらいとして使用した。また、茨城県教育委員会の『学校体育指導資料集「指導にすぐ生かせるワンポイント事例集」』を参考に作成した（資料８）。



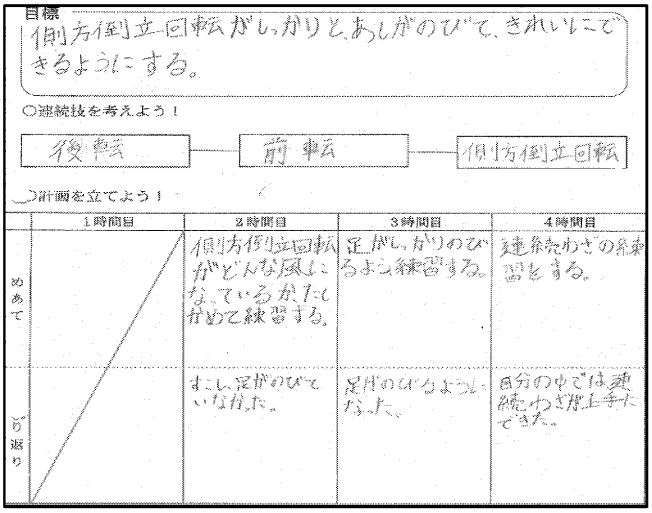
	技の名前	自己評価	チェック 10/5	チェック 10/15
1	前転	上手にできる	○	○
		できる		
		できるようになりたい		
2	後転	上手にできる		○
		できる	○	
		できるようになりたい		
3	開脚前転	上手にできる		○
		できる	○	
		できるようになりたい		

【資料８：マット運動チェックカードの一部】

第１時の授業で、目標を設定する前にチェックシートで自己評価をして、現状を把握した状態で目標を設定させた。その後、第２・３時の授業で練習に取り組んだ後、第４時の授業（最終授業）の発表会後に再度自己評価させた。

○学習カード

手帳形式の良さを活かし､『計画と実行』の段階で使用した目標達成シートとのつながりを意識して作成した。学習カードを活用し、目標達成に向けて授業ごとにねらいを書かせることで、取り組みの計画を明確にすることを目指した。また、目標設定から各授業のめあてを各自で書かせ、目標達成に対する計画を考えさせた（資料９）。計画実行能力を育むために、振り返り以外の項目は全て一時間目に記入させた。また、途中で計画を変更してもよいこととした。



目標
側方倒立回転がしっかりとあしがのびて、きれいにできるようにする。

○連続技を考えよう！

後転 ― 前転 ― 側方倒立回転

○計画を立てよう！

	1時間目	2時間目	3時間目	4時間目
めあて		側方倒立回転がどんな風になっているかたしかめて練習する。	足がしっかりのびるよう練習する。	連続わざの練習をする。
ふり返り		すこし足がのびていなかった。	足がのびるようになった。	自分の中では連続わざが上手にできた。

【資料９マット運動学習カードの一部】

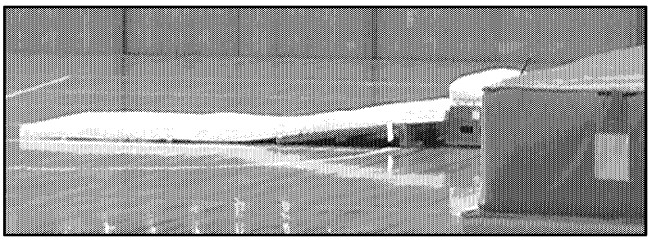
ウ　＜手立て：練習方法の工夫＞

本単元では、児童一人一人が目標をもって練習に取り組み、主体的な学びができるように、以下の３つの工夫を行った。

○基礎の定着

自分の課題に向けた練習をするため、前転や後転など基本的な動きはサーキットトレーニングで実施し、基礎の復習と運動量の確保を目指した。

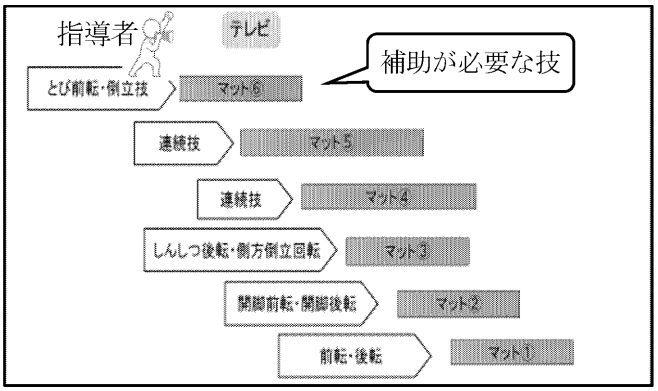
また、前転に不安がある児童もいるので、傾斜を作るなど、サーキットトレーニングに前転・後転のスモールステップ運動を取り入れた。（資料 10）



【資料 10：傾斜を使った前転のスモールステップ運動】

○マットの配置

練習では、それぞれの課題に対して別々の技に取り組む。そのため、安全管理の工夫が必要となる。本単元では、倒立系の技も取り入れたため、補助が必要な技もある。また、練習の際に練習方法に困っている児童への声掛けなど、児童の様子を見るための指導者の立ち位置を工夫する必要があると感じた。



【資料 11：マットの配置】

そこで、マットごとに取り組める技を決め、練習場所を指定した。また階段状にマットを配置することで、補助が必要な技を先頭にしながら、指導者から全体の児童の様子が見えるよう工夫をした。（資料 11）

○練習を主体的におこなうためのアイテム

『計画と実行』の実践における課題から、練習を行う際に、何もヒントを用意せず自由に練習させているだけでは、効果的でないと考えた。そこで、次のようなアイテムを使い、練習方法を選択させ、課題解決能力の育成を目指した。

アイテム	ねらい
技のチェックポイント	児童同士で教え合う際に、どこを見ればよいのかを明確にした。
タブレット端末	手本の視聴や、自分の技を見る場を設定した。

技のチェックポイントを活用し、教え合いの活動を行うために、同じ技を練習する児童同士で練習ができるようマットの配置を工夫した。（資料 11）

タブレットについては、運動中の児童に撮影をさせると運動量の低下が考えられたため、手本を見ることを主な目的として使用した。

④成果と課題

〔成果〕

○ねらいに対して

成長の実感を目指したチェックシートの結果は、単元開始前と後を比較すると、授業に参加した児童全員が授業を通してチェック項目の評価が向上した。自己評価ではあるものの、視覚的に意識できることは効果的であると考えた。ただし、単元の最後に「マット運動の勉強を通して成長できたか」という問いには、数名の児童が挙手をしなかった。数値が向上しても、確実に成長を実感できるとは限らないことを学んだ。

○キャリア教育の視点

ガイダンスを通して、マット運動の学習に見通しをもたせることができた。また、目的意識をもてたことで、授業に対する具体的な目標設定をすることができていた。その結果、単元開始前はマット運動に対して「やりたくない」という声が多かったが、単元後は「もっとやりたい」「楽しかった」という意見が多数あった。この結果から、授業に目的意識をもたせる手立てとして、ガイダンスは効果的な手段であると考えた。

〔課題〕

○ねらいに対して

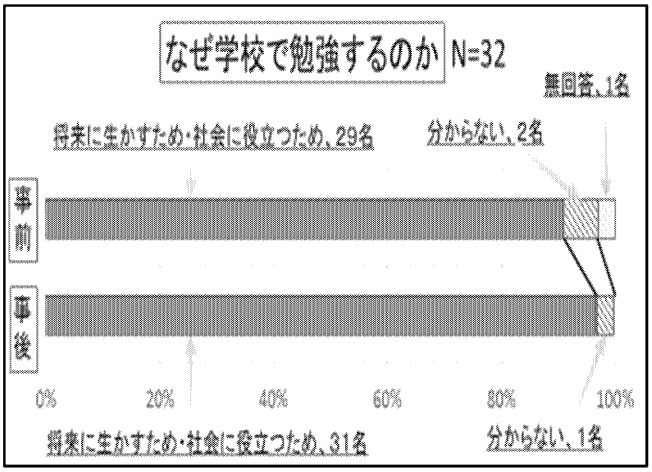
授業に対して具体的な目標を設定することができており、学びに対して目的意識をもっている児童が多い様子であった。しかし、主体的な活動を取り入れすぎたことにより、運動が好きではない児童にとっては、何を練習すればよいのか疑問を感じる結果となり、意欲的な活動とならなかったのではないかと感じた。

授業に目的意識をもたせることは必要であるが、同時に楽しく・分かりやすい授業を行っていく必要があると感じた。児童が主体的に学ぶ意欲を持つためには、“目的意識”“楽しさ”“分かりやすさ”など他にも様々な要素が必要である。今回は“目的意識”にこだわったが、今後はバランスよく場面に合った要素を取り入れる必要があると考えた。

Ⅴ　研究の成果と課題

（１）アンケート結果

実践後アンケート結果は次のようになった。



【資料 12：「なぜ学校で勉強をするのか」意識調査】

実践前と比較すると、学ぶ意義を記述できた児童が２名増えた。この２人は、児童Ａと児童Ｃである。児童Ｂは、実践前と同様に「分からない」という回答であった。

【表３：意識調査に関する事後アンケート結果の比較】

質問内容	児童Ａ		児童Ｂ	
	前	後	前	後
何にでも進んで挑戦できる。	1	1	2	2
難しいことでもやればできる。	1	3	3	2
勉強は将来につながる。	1	2	2	4
合計	3	6	7	8

（２）考察

○児童Ａ

表３のように、実践後、児童Ａのアンケートの数値が向上した。実習Ⅰでは、目標設定に苦戦していたものの、実習Ⅱでは夢に向けた具体的な目標を設定することができていた。その結果、『計画と実行』『授業で目的意識を持つ』段階を通して、目標に向かう中で成長を実感したことにより、「やればできる」という意識が芽生えてきたのではないかと考えた。

また、アンケート調査の結果のうち、「進んで挑戦する」という意識につなげることはできなかったが、「なぜ学ぶのか」の問いに答えを見いだしたことは、本研究における成果であると考えた。

○児童Ｂ

表３のように、「やればできる」という意識が低下した。この原因として、目標に向かった実践の中で、成功体験を得られなかったことが考えられる。児童Ｂは２度の実践を通して自分なりに目標をもつことができず、『目標の設定』『計画と実行』の段階で、具体的に目標設定ができていなかった様子が見られた。

また、『授業で目的意識を持つ』段階では、児童Ｂが日頃体を動かす児童ではなかったため、意欲的な学習にはつながらなかったように感じた。ただし、表３を見ると「勉強が将来につながる」という意識の数値は高くなっている。意識はあるものの、成功体験が得られなかったため、「なぜ学校で勉強するのか」の問いに対しても「分からない」と回答したと考えられる。

また、成功体験は得られなかったが、体育の授業ではチェックシートの数値に向上が見られた。そのため、練習の様子を評価したり、単元前後の変化を意識させるなど、プロセスを評価する必要があったと考えた。

○学級全体を通して

学級全体の平均値を見ると、「やればできる」という意識が低下した。逆に、「勉強は将来につながる」という意識は上昇した。この原因としては、児童Ｂ同様に成功体験を得られなかったことが考えられる。ただ、『授業で目的意識を持つ』実践において、全員のチェックシートの数値が上昇したように、目標が達成できなくても、小さな成長はある。今回の研究テーマにより近づくためには、小さなことでも成長の実感ができるような工夫が必要であったと考えた。

○キャリア教育の考え方を取り入れて

本研究では、“将来を見通して今の自分を考える”ことで、学ぶ意義を考えさせることができた。学級の中には「なぜ学ぶのか」が答えられない児童がいるので、キャリア教育は教育活動において必要な視点である。

しかし、体育の授業ではキャリア教育を意識しすぎて、技能面に十分時間をかけることができなかった。キャリア教育を主体として進めていくのではなく、ワンポイントで取り入れ、授業に目的意識をもたせることが必要であると考えた。

（３）今後の展望

本研究を通して、児童が学習活動に目的意識をもつことができたのは成果である。ただし、児童の主体的な学びにはつながっているとは言い難い。今後は、成功体験を得られなかった児童に対し、どのように再度挑戦する意欲を持たせるかが課題である。また、どのように成長を実感させるかが重要となると考えた。

本研究は、教科の実践としては体育のみを行ったが、他にも多数の教科学習がある。各児童が一番輝ける場所で、目的意識をもたせ成功体験を得ることができるように働きかけることで、将来設計能力や意思決定能力が育つ可能性が高いのではないかと考える。

Ⅵ　おわりに

主題設定の理由に、「先生、何のために学校で勉強するの」と児童に質問されたことを述べた。当時の私は、「君の将来のためだよ」と答えたが、本研究を終えた今の段階なら「生きていくためだよ」と答える。その理由は、児童にとって将来について考えることは難しいことであると感じたからである。それに対して、生きることは児童が実際に体験していることであり、現在の生活にこれまでの学びが生かされている点から、イメージを持たせやすいと考えた。

社会と関わる機会が少ない児童にとって、将来に対するイメージはしにくいため、「将来なんてどうでもいい」という回答もでてくるだろう。キャリア教育は、将来と現在を関係づけることができる教育である。キャリア教育を通して、将来に対する意識から今の自分を振り返ることで、自己の意識から将来に対する目的意識の必要性を感じることができるような教育ができるよう、今後も研究を続けていきたい。

Ⅶ　引用・参考文献

○著書

・国立教育政策研究所(2002)『児童の職業観・勤労観を育む教育の推進について』
・小林一久(1982)『達成目標を明確にした体育科授業改造入門』明治図書 p. 11
・齋藤孝(2011)『人はなぜ学ばなければならないのか』実業之日本社 p. 2, 269
・関和則(2008)「未来を見つめ、夢をもち努力する子どもを育成するキャリア教育の在り方－6 年「12 歳のハローワーク～なぜ勉強するのか～」の実践―」『教育実践研究』PP. 217-222
・寺本之人(2014)『ライフスキルで進めるキャリア教育』風人社
・中央教育審議会(2011)『今後の学校教育におけるキャリア教育・職業教育の在り方について』
・長谷川隆(2012)『ビジネス手帳で中高生の“生活習慣力”がみるみる変わった！』日本能率協会マネジメントセンター p.18
・文部科学省(2011)『学校が社会と協働して一日も早くすべての児童生徒に充実したキャリア教育を行うために』
・文部科学省(2016)『「キャリア教育」資料集』
・文部科学省(2017)『小学校学習指導要領解説 総則編』
・文部科学省(2011)『小学校キャリア教育の手引き』教育出版

○ＷＥＢ

・茨城県教育委員会(2004)『第 33 集 学校体育指導資料集「指導にすぐ生かせるワンポイント事例集」』
(https://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/gakkou/karada/taiiku/sidou/33index.html) (2018 年 9 月 20 日閲覧)
・中央教育審議会(2016)『初等中等教育分科会(第 108 回) 配布資料 補足資料(1)』
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1381453.htm) (2018 年 10 月 13 日閲覧)